

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

石川学

本論文（『ジョルジュ・バタイユにおける行動の論理と文学』）は、ジョルジュ・バタイユにおいて、政治的行動の論理が、いかなる学知を背景に構築され、同時に、その行動の論理が、いかに、文学と関連を持ちうるかを、バタイユの初期から晩年にいたるテキストの精緻な読解を通じて、浮かび上がらせようとした、野心的論考である。

筆者は、本論文で、何度か、バタイユが、1938年の「魔法使いの弟子」という文章の中で、現代社会における、「科学の人間」、「虚構の人間」「行動の人間」の三者の分離と、それらの統合の可能性を論じていることに触れている。本論文は、いわばバタイユにおけるこれら三者、つまり、「学知」、「文学」、「政治」相互の関係の、きわめて複雑なありようを、テキストに即して、解明しようとしたものである。

本論文は序章と三章からなる構成をとっている。序章で全体の構成が説明されたあと、第一章「武器としての論理」では、第二次大戦勃発までの、バタイユにおける、政治的行動の論理の形成が跡づけられる。第二章「防具としての論理」では、第二次大戦後の、世界大戦勃発の恐れの中、戦前の、「武器」としての行動の論理が、自滅的カストロフイーの危険に対する、「防具」としてのそれへと変化したことが語られる。そして、第三章「文学と無力への意志」では、以上のような行動の論理と文学との関係が論じられる。

以下、各章ごとの内容を細かく追っていく。

第一章「武器としての論理」では、第二次大戦までの、バタイユにおける、「行動」と「学知」の関係が、いくつかの論文の詳細な読解を通じて明らかにされる。が、ここで重要なのは、この「行動」と「学知」の関係が、既存の学知の単純な援用による行動の正当化にはなっていないことである。行動の論理は、既存の学知の独特の応用とその超克を経る中で導かれる。このことは、とりわけ、バタイユの、「ファシズムの心理構造」を分析した第三節において強調される。

第一章第一節では、『ドキュマン』誌（1923-31年）で主張される反観念主義と、「低い唯物論」の検討がなされる。そこでは、建築物や自然形態、植物の構造や人体の部分などに見られる、アイデアからの逸脱という現象の中に、自然法則の必然性を見たバタイユの姿勢が、社会秩序の転倒という現実行動の可能性に接続される形で分析される。

第二節では、『社会批評』誌掲載の論考、「ヘーゲル弁証法の基礎の批判」（1932年）の分析がなされる。ニコライ・ハルトマンのヘーゲル弁証法解釈と、精神分析における「父と息子」の主題の解釈とを結びつけながら、バタイユが、階級闘争を、労働者階級がブルジョワジーから蒙る否定的行為に対する否定として、つまり、「否定の否定」としてみなすに至る論理的道筋が示される。

第三節では、バタイユの「ファシズムの心理構造」（1933-34年）が取り上げられる。筆者は、この文章でバタイユが言及する「異質学」が、ファシズムの心理に見られる、非合理

的情動を、精神分析学や社会学などの、合理的学知によって探究する学であることを強調する。そして、現実のファシズムに見られる、民衆の情動の沸騰に対抗して、革命的・転覆的な情動を組織する可能性を、バタイユが、認識の体系の徹底化の中に見いだしたことに注目する。こうして、筆者は、バタイユの異質学の中に、武器としての論理、武器としての学知の探究を見てとる。

第四節では、こうした武器としての学知の実践の試みとその限界が、バタイユが、アンドレ・ブルトンらと結成した行動組織「コントロール＝アタック」の活動の分析を通じて論じられる。

第五節では、雑誌『アセファル』（1936-39年）に見られるファシズム論が分析の対象となる。そして、ヘラクレイトス＝ニーチェ的な、あらゆる存在の定立を許さぬ時間の観念と、こうした時間観念が生み出す「悲劇性」の感情が、いかに、至高のリーダーの殺害という独特の「行動」の論理に接続されるかが説明される。

第六、第七節では、1937年に、バタイユが、ミッシェル・レリス、ロジェ・カイヨワとともに設立した「社会学研究会」における、「聖社会学」の実践がとりあげられる。第六節で、フランス社会学、ニーチェ、コジェーヴによるヘーゲル読解などがバタイユに与えた影響が論じられたあと、第七節では、こうした「聖社会学」という学知が、ファシズムの「軍隊の帝国」に対抗する「悲劇の帝国」形成という、行動と結びつけられていく論理が示される。

第二章では、第二次大戦を経た、バタイユの、行動の論理の変化が記述される。バタイユは、戦後、第一章でとりあげられた、精神分析や社会学などの学知と距離をとり、経済学を重視するようになる。それは本論では、武器としての論理から、防具としての論理への変化としてとらえられるが、第一章における、行動の論理化の理路同様、行動をめぐるバタイユのこの変化もまた、きわめて複雑な道筋をたどる。筆者は、第一章同様、この複雑な論理の道筋を丹念に再構成してみせる。

第一節では、『ニーチェについて』（1945年）第三部で語られる、バタイユ自身の神経症的体験と、1947年の論考「広島に住民たちの物語について」をとりあげ、バタイユの「全般的経済学」につながる、「瞬間の生の充実」というテーマが抽出される。

第二節、第三節では、それぞれ、戦前のバタイユが依拠した学知である、精神分析学と社会学に対する距離化・評価変更がとりあげられる。まず、第二節では、バタイユが、1948年5月の書評において、かつて「異質学」に理論的支柱の一つを提供した精神分析に関して、その「意識と無意識の総合」の考察の不十分を批判していることが紹介される。第三節では、「社会学」をめぐる、かつての、「社会学研究会」の同志であった、カイヨワやレリスとの、理論的齟齬が明らかにされる。そして、諸存在の脱自的一体化を探究するバタイユが、ついに、現実の集団的行動を通じた実存回復への希望を断念し、現実には場を持たない「不在の共同体」への希望を抱くにいたる経緯を跡づける。

第四節では、第二、三節でとりあげられた精神分析学や社会学に加え、本来認識不可能

であるはずの主体の内奥性を認識可能な客体へととして扱う学知である実存主義哲学に対しても、バタイユが批判的距離をとったことが示される。そして、それらに代わって、認識不可能な内奥性のあり方を、現在時の瞬間における非生産的消尽として示す学知としての「全般経済学」へと、バタイユの関心が移行していったことを示す。

また、第四節の最後では、こうした、全般経済学による、学知を用いた認識不可能なものへの接近の試みが、絶対知とその対極の非知とが近接しあう、ヘーゲルの『精神現象学』の試みと比較される。この、ヘーゲルにおける、極限にいたるまでの知の徹底による、知の外部の開示の可能性というテーマは、文学的言語を通じた内的経験の表象が、経験と語り的一致という「勝利の感情」と、その対極の「圧倒的無力」の近接のうちに実現されることを考察する、第三章の主題へと直接つながっていく。

第五節は、第二章のタイトルである、「防具としての論理」というテーマが、もっとも見やすい形で示される節である。具体的には、米ソ間の極限的対立を生み出している過剰エネルギーの蓄積を前にして、バタイユが、アメリカによる富の全世界的贈与の遂行という形での、カタストロフィーの回避という政策提言を行ったことが語られ、「全般経済学」が、防具としての学知として機能した様子が示される。

以上、第一章、第二章で、行動の論理の、武器として、防具としての側面が語られたあと、最後の第三章では、それらの行動の論理が、バタイユにおいて、いかに文学の主題と結びつくかが論じられる。そして、武器としての学知の徹底による共同体の設立の試みが、究極的に不在の共同体に帰結したように、また、絶対知が同時に決定的な非知でもあるように、文学もまた、勝利の感情を経て、文学の不在に至るとされる。こうして、はじめに述べた、「学知」「文学」「政治」の三者は、無力や不在という共通的性格のもとに提示されることになる。

第三章第一節では、『内的経験』(1943年)の中心的問題である、生きられた内的経験を「推論的言述」によっていかに表象するかという問いが考察され、それが、推論的言述を用いた、推論的言述の否定という、不可能に近い「苦役」として示される。また後半では、ブルーストの文学が、勝利の感情と最終的な充足の不在とが近接する、同様の内的経験の表出の営為として論じられる。

第二節では、ブルーストに見られた、勝利の感情から圧倒的無力への転落というテーマが、『内的経験』の最終部分の中の、バタイユ自身の二つの詩編の中にも見出せることが述べられる。

第三節では、『ニーチェについて』の新たなブルースト論に着目し、それまで内的経験とよばれていた経験に、超越的な神の超越性の解体や崩壊が見られることが指摘される。また、『エロティシズムの歴史』の中のサド論が、バタイユの「無神学」との関係において論じられる。

最後の第四節では、『文学と悪』(1957年)の中の、ウィリアム・ブレイク論、カミュ論がとりあげられ、サルトル的な、文学と「行動」の不可避的連関とは反対に、あらゆる行動

の不在、権利の不在のうちに、文学の特質を見出す、バタイユの姿勢が示される。

以上、本論文は、ジョルジュ・バタイユの難解なテキストを、先入観のフィルターを可能な限りかけずに、詳細に読解した、力作である。この論文のバタイユ研究への寄与は、まさしく、こうした粘り強いテキスト読解によって、きわめて複雑なバタイユのテキストの論理的道筋が、多くのテキストに関して、綿密に示されたことに見出される。

本論文では、バタイユのテキストの引用は、全て筆者自身の翻訳によるものである。このことで、ひとつひとつの翻訳を通して、筆者は同時に、バタイユのテキストの複雑な理路を示しえたといえる。

こうした筆者の、バタイユのテキストに密着した読解を通じて、例えば、第三章第一節では、『内的経験』における、推論的言述を用いた、推論的言述の否定という、難解なプロセスが、第三章第二節では、バタイユとブルーストに共通してみられる、勝利の感情から圧倒的無力への失墜の過程が、また、一章、二章では、バタイユが、精神分析学や社会学などの様々な学知と結んだ複雑な関係の具体的な諸相が、詳細に描き出された。

ただ、こうした、バタイユのテキストに密着した読解は、反面で、本論文の弱点にもつながっている。審査会では、論文全体のつながりが弱いことや構築の意志が弱いことが指摘された。また、翻訳部分が長すぎて、論旨が追いにくくなっているという意見も出された。他にも以下にあげるような様々な問題点が指摘された。

1. 第三章で文学の問題が中心的に扱われながら、バタイユ自身の小説や詩作品、あるいは、小説の序文が一切（第三章第二節で論じられる2篇の詩を除いて）取り上げられていない。
2. 第三章第四節でカミュとの関係で論じられる *souveraineté*（論文では「至高性」の訳語が与えられている）の概念については、より厳密な定義を与える必要がある。
3. バタイユ研究はフランス本国においてだけでなく、日本でも十分な蓄積がある。本論文は、それら日本におけるバタイユ研究についてほとんど言及していない。

以上、審査会では、多くの問題が指摘されたが、難解なバタイユのテキストに、正面から取り組み、その複雑な論理展開を丹念に示したこの論文の意義はきわめて大きい。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。